教職大学院 Newsletter No. 53

福井大学大学院　教育学研究科　教職開発専攻　since2008.4　2013.05.18

改革への情熱、そしてリードへの気概

聖徳大学副学長　増井　三夫

福井大学を調査目的で最初に伺ったのは１２年前のことである。そのときは，大学院修士課程において拠点校方針を開始して注目されていた初期のころであったと記憶している。私は当時上越教育大学の副学長で改革を担当していた。上越教育大学は，新構想のしかも教員のための大学院大学として開設されたが，それを平成１２年に改組していた。新構想を徴する一つとして，教育実践の「高度」な専門的力量を形成する〈はずであった〉教育基礎講座，学校経営講座，教育方法講座，生徒指導講座という教育研究制度があげられる。平成１２年度の改組は，この４講座を学習臨床講座と発達臨床講座に再編したのであった。

再編の狙いは，学校での子どもの学びや様々な活動の展開場面を教育研究のフィールドとして，教員の問題解決能力を育成することにあった。例えば，学習過程臨床コースの先進的授業では，附属小学校で，学習課題に対する子どもの学びの過程を検討し，つまずきの場面を明らかにする→つまずきの原因を解析する→適切な指導を行う→指導の成果と課題を検証する，といったプログラムを先駆的に実施していた。

改組は，現職院生に大変好評であった。全国から派遣される現職院生の多数は学習臨床コースに入学した。教員を派遣する県の教育委員会からも，実際に派遣院生の授業場面を参観し，「われわれが期待する大学院研修である」といった評価をいただいた。

私はこのプログラムを附属以外の学校との連携で実施する計画をたてていた。その連携の実際を学内でも議論していた。当時の私は，改革が進んでいる大学があれば，その大学を訪問して，改革の情報を得ることを大切にしていた。改革に着手することは，改革の実質化，さらなる発展を期して，改革の推進をデザインしていくことである，という信念にちかい考えを持っていた。そんなときに，福井大学大学院修士課程における改革のニュースが入ってきた。

すぐに訪問調査に伺った。確か一階の小会議室であったと記憶している。学部長，日本教育大学協会北陸地区会の評議員といった教授たちがテーブルの奥に，そして改革を担当している若手のスタッフが入口近くに既に着席していた。その若手スタッフは講師と助教授で占められ，その中に松木健一先生がいた。

小会議室での会話は，当時の，いや，現在の教職大学院の在り方をめぐる議論の縮図であったと，という印象が福井大学についての記憶の古層に沈潜している。私は若手スタッフの取組に強い関心を抱いていた。その旗手が松木先生であることが私にも分かってきた。改革への情熱がストレートに伝わってきた。教授の一人が，この改革は若手スタッフで行っているが，彼らはいまに倒れてしまうよ，と語った。改革を進めていくスタッフの存在感に圧倒された。熱い情熱と限界を超える努力が改革を動かしていたのだと思う。松木先生との再会で，いまの私は勇気を得た。

私自身のことで言えば，学習臨床の名称を平成１０年の改革論議スタート時点で提案していたが，私の研究領域は基礎研究，それも教育史学を越境した歴史学の分野で仕事をしていた。そのことを知っていた教授は，他大学の教授とともに，いずれも教育学界では私の大先輩にあたる研究者であった。日本教育大学協会北陸地区会の懇親会で，何度も，両教授の前で，私が学習臨床と教育

内容

改革への情熱、そしてリードへの気概　(1)
合同カンファレンスに参加して　(3)
staff紹介　(6)
院生紹介　(9)
研究集会の案内　(14)
福井大学教員免許状更新講習について　(15)
ラウンドテーブル速報　(16)

実践学を標榜していたことについて，君はいつ専門研究を止めたのか，教育実践研究を「学」で言えるのか，といったご叱責に近い批判を甘受していた。このことも福井大学の記憶の古層に共存している。

先ほどのべた上越教育大学でのプログラムであるが，私は副学長を降りて学習臨床講座に入り，それを上越市立大手町小学校と研究室との連携のバージョンで行った。同校は文部省研究指定校として生活科の開発研究を行ったことで全国的に有名であり，研究推進委員会のもとで実践研究を日常的に推進していた。当時私の研究室では，実践研究を行う小中高の現職教員とストレートマスター，そして博士課程の院生と学部生が所属し，多いときには１０名を超えていた。大手町小学校の研究推進委員会は毎週水曜日，夕方から２０時，２２時を過ぎることは珍しくなかった。推進委員会では，毎週実施される研究授業の指導案検討が行われる。その案は事前に学年委員会での検討を経たもので，例えば，教師の発問の検討では，一つひとつの発問がどのような子どもの認知活動にどのような働きかけを予定しているのか，その働きかけでどのような変容を予想しているのか，予想できる根拠は何か，といったことが指導案の時間の経過にそって，検討される。

上越教育大学大学院で研修した教諭の指導案がちょうど対象となっていた。上記の検討では〈徹底〉が暗黙裡に了解されている。〈その働きかけでどのような変容を予想しているのか，予想できる根拠は何か〉の議論で，提案者は応答できず沈黙が続いた。結論は，再提出であった。この推進委員会に，部外者，それも大学の研究室が入ってきたのは初めてであった。研究室所属院生で，大手町小学校をフィールドとする現職院生とストレートマスターがほぼ検討会に同席するとともに，ビデオ撮影を行った。

大手町小学校では，公開研究授業→授業後検討会→分析レポート作成（全教員）→研究推進委員会での検討が実施される。この流れに私も含めて院生が参加する。院生の研究課題はここから形づくられてくるが，どのような課題であっても質的研究法（Grounded Theory Approach）による実践の理論化は，学部生であっても，義務づけられる。

大手町小学校の授業研究は子どもの認知活動の丹念な検討にもとづいておこなわれる。また，上掲のプログラムに戻るが，子どものあの学びの過程を，それが実践されている大手町小学校の２年生と４年生の授業で検討し，最新の学習理論の一つであるB.J.Zimmerman らの「自己調整学習（self-regulated learning）」の事例として日本教育心理学会で報告したことがある。この理論の代表的研究者であるニューヨーク市立大学秋場大輔教授より高く評価されたが，ここで敢えてこの事例を持ちだしたのは上掲した〈教育実践の「高度」な専門的力量を形成する〉に関わっている。まさしく「高度」の意味である。「高度」は，理論と実践の往還とも関係しているであろう。

私は教職大学院の評価に関わる機会に，上記の教職大学院のキーコンセプトである〈理論と実践の往還〉と「高度」な専門的力量形成について，評価委員と意見を交わすことにしているが，私の限定された経験では，この両者は議論前の自明のこととして≪存在≫しているのかと思うほどである。

教職大学院は，授業実践との関係でいえば，学校での授業研究の力量形成に寄与することが大切だと，私は認識している。そのさいに，連携校との関係でみると，教職大学院の役割意義は何か？それは，「協働」に含意されているような意味であろうか。

これに関して例をあげてみたい。私は上越時代に，京都市立高倉小学校，御所南小学校，京都御池中学校，府立堀川高校に毎年授業参観を行っていたが，前者の小中連携校において開発され，実施されている「読解科」と後者の「探求科」は，インタビュー調査で分かったのであるが，先生たちの実践研究から開発されたものである。「読解科」は，先生たちの時間をかけ，徹底した実践研究の理論化から，そしてそれにもとづいた開発の成果である。この事例では，大学との協働は見られない。私は，学校がこのように，自ら実践を理論化し，教育課程の開発を行う「高度」な専門的力量を有していることがこれから求められてくる，あるいはそれを求めたいが，その時に教職大学院はいかなる協働を自らとることになるのか，あるいはとるべきなのか？

福井大学教職大学院の「学校改革実践研究報告」を丹念に読むと，私の疑問は氷解されるかもしれない。この「学校改革実践研究報告」を手にした時の驚きは，長期に滞在して，この報告を質的研究法にもとづいて分析してみたいという衝動を抑えかねたほどである。

私は，そろそろ，教職大学院の存在意義を，連携校での実践研究がどのていど変容の経験を重ね，実際にそのレベルを上げることに寄与しているのか，同時に教職大学院自体の研究レベルがどのていど向上しているのか，という次元でも議論を交流していくことが大切になっていると思っている。

最後に私がずっと気になっていることである。それは，教職大学院の評価について，成果が強調され，その成果とともに課題が明示されていないことである。成果が客観的に認知されるためには，成果の理論化と課題の明確化が不可欠である。それがない成果には，さらにその成果の質の向上や発展をデザインする際のリアリティを欠くことになる。

福井大学と拠点校を訪問し，森透教授の丁寧な説明のたびに，教職大学院改革をリードしているという気概に圧倒されたまま，近いうちの再訪を期して，帰途についた。

◆ 教育改革の展開を踏まえ，長期的な実践の展望をひらく

April　合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース２年／福井市中藤小学校　　髙間　恵美

１年前私は大学院の「学生」になったのであるが，仕事を続けながら月に１度の大学院，学生証をもらっても学食が利用できても「学生」だという感覚は全くなかった。ところが，今回の合同カンファレンスで初めて「１年先輩である学生」の何とも言えない喜びを感じた。１年前は，どのように学べばよいのか不安でいっぱいだったが，見通しのもてるこの余裕。このような感覚は，まさしく２５年前の学生時代以来の嬉しく懐かしい感覚だった。さらに，同じサイクルを繰り返すことの意義も体験することができた。文科省からの資料や長期実践研究報告を読むことは，２回目の学習である。しかし，今回は自分なりの目的をもって主体的に読み進めることができた。この１年間のささやかな自分の成長を感じることができた。子どもたちがスパイラルに学ぶ意味はよく分かっているつもりだったが，自分が体験することでさらにその重要性を実感することができた。

松田先生からは「教育改革の展開を吟味することの意味」と題して，学校を取り巻く現状と課題，平成の教育改革，今後の教育・教師の在り方についてお話をいただいた。今後求められるのは「学び続ける教員」であり，私たちが教職大学院で学ぶことの意味を改めて考えさせられた。

１日目の午後は，教育改革に関する文科省や中教審，県教委からの資料を読み，２日目の午前中は教職大学院の先輩方の長期実践研究報告を読んだ。１年前の私は，グループのメンバーにどのように内容を伝えるか，どのようにレジュメを仕上げるかということばかりに気をとられてしまい，時間を気にしながら慌てて読んでいた。しかし今回は違う。報告やレジュメではなく，じっくり読むことが大切ということが分かっていた。どんな報告やレジュメになっても，グループのメンバーや大学院の先生方は温かく聞き入れてくださることを去年１年間で十分体験してきた。この教職大学院での学びの場は「安心して学習できる」環境なのである。たっぷりの時間を与えられ，資料と向き合うことに心地よさを感じながら，１日目は「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（中教審）」「教員研修の在り方検討会報告書（県教委）」を，２日目は勝見浩文先生の「授業観転換のプロセス」を読んだ。

そして，最大の楽しみはグループのメンバーと語り合えること。「３つの種」を語るグループ，クロスセッションでのグループ，そして昨年度はなかった「自分の実践を紹介する」グループがあった。１年前の私は，的確に内容を捉えて堂々と話すＭ２のリーダーの先生方や，知識豊富な若いストレートの学生さんに圧倒されていた。自分の拙さを恥ずかしく思っていた。が，もちろん今回は違う。経験も校種も違う方たちの，資料の捉え方・まとめ方・語り方の違いを，お一人お一人のすばらしい個性として学ぶことができた。「自分との違いを認め合う」ことは，私の勤務する中藤小学校第３学年の「めざす児童の姿」であるが，この２日間で私自身がそのことを体験することができた。

私は「学び続ける教員」を支える教職大学院の折り返し地点を過ぎた。ゴールでもあり新たなスタートでもある平成２６年３月に向かって，楽しく走り続けていきたいと感じた４月の合同カンファレンスだった。

スクールリーダー養成コース１年／福井市藤島中学校　　竹野　亨

いよいよ始まるという緊張感の中で，初めての合同カンファレンスに参加した。学生となって学ぶという新鮮な気持ちや，たくさんの先生方とどのような語らいができるのか楽しみな気持ち，これまでの経験とこれから学ぶことをどのように融合していけるかという不安な気持ちが交錯していた。先日，中学校に入学してきた生徒たちも同じような気持ちだったのだろうか…等々考えながら，コラボレーションホールへと入った。

最初のグループ討議では，準備していった「３つの種（①自分のこれまでの歩み，大事にしてきたこと②現在の職場について③教職大学院で深めていきたいこと」をもとに自己紹介が行われた。インターンの先生は，生徒の話に耳を傾け共感的に聴くことを意識していることや，保健体育の教員として，運動嫌いの生徒が授業に意欲的に取り組めるように，積極的に関わり，できたことをほめるといった実践を行い，ひとり一人の生徒を大切にしていることを強く感じた。スクールリーダーの先生の「人と人とのつながりを大切にして」学級経営や，先生方との関わりを行っているという話には，体育主任や研究主任という立場で，苦悩しながらもご自分で考えた取り組みを行い，経験を重ねることで，自信を持ち仕事を行っていることを感じた。まさに少し前の自分と重なる思いで話を聞いた。最後の私の話では，本校での取り組みについて，「積極的な取り組み」と認めて下さったことをこれからの励みにしたいと思った。

次に，「記録を通して実践者の成長や支えていた要因を探ることで自分の考察をするため」に，長期実践研究報告『学びと生活を融合する中学校を創る（大橋　巌著）』を読ませていただいた。私自身，今年度より教務主任になったことから，至民中学校の移転開校にあたり教務主任として大橋巌先生がどのような取り組みを行っていったか興味深く読むことができた。もっとも印象的であったのは，「人々の意識を変える一番の方法は枠組み自体を変えることである」という考えのもとに，『授業を変えること』，『異学年集団（クラスター制）の導入』，『地域との連携』の３つのことを中心に学校づくりを行っていったことである。本校においても昨年から今年にかけて，同様の取り組みを始めていることから，指針となるのではないかと感じながら読んでいった。これからの本校の取り組みと重ね合わせながら読むことでいくつかのアイディアも浮かんできた。しかし，研究と実践がかけ離れたものとならないように，現状をしっかりとふまえながら本校の実状にあった取り組みが大切であるとも感じた。

最後に，自分の教科学習の経験について話し合った。授業を変えることで学校が変わっていくことを再確認できた。グループ討議を多く取り入れ，協働する授業を行うヒントもいただいた。課題を工夫し，生徒達が問題を追求したくなる場面を作り，話し合い活動を充実させていきたいと思う。

あっという間の２日間であったが，たくさんの先生方と語り合え学ぶことが多かったと感じる。今回は予備日程での参加であったが，本日程であればもっとたくさんの先生方と語り合うことができるのでこれからが楽しみである。また，合同カンファレンスを終えてからこの１週間，毎日の仕事の合間にふと自分の教員生活を振り返ってみたり，これから自分がどう行動を起こしていくとよいかなど考えていたなと思う。これまで何気なく考えていたことを意識化していくことが教職大学院の学びになるのかなと感じている。

教職専門性開発コース２年／美浜町美浜中学校　　孫野　貴之

教職大学院に入学してから，早くも１年が経ちました。今，振り返ってみると１日１日がとても忙しく足早に過ぎ去っていったように思います。しかし，その１日１日が，どれも色濃く，充実した日々であったようにも思います。昨年度は，子どもたちとのふれ合いや教職大学院での語り合いを通して，多くのことを学び，自身の成長に生かすことができたように思います。特に，ストレートマスターの先生方との語り合いは，自分では気付くことのできないモノの見方や考え方に触れる機会となり，私にとって，とても学びの多い有意義な時間となりました。今回は，今年度，初めての合同カンファレンスということもあり，「どんな先生方との出会いが待って

いるのだろう…。」という期待とともに，今年度もストレートマスターの先生方と互いの実践を語り合えることへの喜びを感じながら，合同カンファレンスに参加しました。以下では，今回の合同カンファレンスを踏まえて，感じたことや考えたことを書くことで，振り返りにしたいと思います。

１日目は，教育改革に関する資料を読みあって内容や感想を紹介し合いました。私は，「子どもたちのコミュニケーション能力の育成」に関する資料を読み，その内容や感想を紹介しました。その中で，ある先生が「体育の授業は，非言語活動でもコミュニケーションができる。」という一言にはっとさせられました。今まで，「コミュニケーションとは，言語活動によって行われるもの」と思っていた私にとって，コミュニケーションの捉え方が広がる瞬間でした。そして，その事が体育の授業におけるコミュニケーション育成の在り方を，深く考えさせられるきっかけともなりました。

２日目の前半は，長期実践報告書を読み，実践の展開・実践者の成長，それらを支えた要因を探りました。私は，教職大学院に入学してから「協働の学び」という言葉を耳にしましたが，「協働の学び」とは，子どもたちのどのような様子を指すのか，よく分かりませんでした。そこで，協働する子どもたちの姿を追いたいと思い，名葉浩行先生の協働して学びを深める授業についての報告書を読みました。そこでは，授業中の子どもたちの発言が絶えずつながり合っている様子，また，子ども同士の発言がお互いに影響を与えながらも，自分の考えをしっかり発表している子どもたちの姿がありました。名葉先生の報告書を読むことで，「協働の学びとは，モノやヒトとのつながり合いから，自分の考えをより深めていくことなのではないか。」という考えをもつことができました。これまでも，モノやヒトとのつながりを意識した実践を行ってきたつもりですが，まだまだ自分の甘さを痛感させられたように思います。

２日目の後半は，これまでの自分自身の授業実践，カリキュラムづくり，教科学習の経験を語り合いました。私は，同じ教科(保健体育)の先生方がいなかったため，社会科のグループに入って実践を語ることになりました。最初は，社会科の先生方の中で自分の実践を語ることに，とても戸惑いを感じていました。しかし，社会科の先生方の実践を聞く中で，保健体育の授業とも繋がる部分があることに気付き，戸惑いなく自分の実践を語ることができました。また，自分の実践を語る中で，体育の授業における課題設定の仕方や工夫について，多くのアドバイスを戴くことができました。今回，社会科の先生と語り合うことで，異校種・異教科の壁を越えて語り合うことの楽しさや奥深さを改めて感じることができたように思います。

この２日間，資料や長期実践報告書を読み，スクールリーダーの先生方と互いの実践を語り合うことで，新たな気付きを得ることができました。これからは，教職大学院での学びを少しでも実践に生かせるよう，何事も前向きにチャレンジしていきたいと思います。

教職専門性開発コース１年／福井市中藤小学校　　天谷　美怜

４月の合同カンファレンスでは，「３つの種」を中心とした実践的な自己紹介，教育改革に関する資料の吟味，長期実践報告を読んでのクロス・セッションなどを行いました。私は人の話を聞くことや，じっくり時間をかけてまとめることは好きですが，自分の思いや経験を語ること，短時間で端的にまとめることは苦手に感じているため，不安な気持ちで合同カンファレンスに参加していました。２日間を振り返ってみると，まともなレジュメを作ることすらできず，なんとか乗り越えた，という表現しかできません。そんな私の話でも熱心に聞いてくださった先生方の，何でも吸収していこうとする，学びに対する熱心な姿勢が強く印象に残っています。

この合同カンファレンスでは，先生方のお話を生の言葉で聞くことにより，「先生」という存在を，私のなかではっきりさせることができたように思います。私は子どもの頃，教師に対して何となく距離をつくってしまい，また，先生に注意されるような行いも一切しなかったため，面談以外で教師と話す機会はあまりありませんでした。そんな私にとって「先生」とは，単に「授業をする人，クラスの責任者」でした。あまり近い存在では無く，しかし親のように私をよく見ていて，心配してくれたり進路の話をしたりする，よく分からない存在でした。そのため，私の中の「先生」と自分がなろうとしている「教師」が結びつかず，教師を目指すにあたって，どこかもやもやした不安な気持ちがありました。そんな

中，合同カンファレンスで先生方の話を聞かせていただいたことにより，「あの先生もきっとこんな風に，私たちのことを思ってくれていたのだな」「このように考えて，こんな願いをもって，あのような授業をしていたのかな」といったように，目の前で語る先生と重ねて当時の「先生」の存在を捉え直し，よく分からない存在であった「先生」を近くに感じることができました。そして，「先生」と「教師」が私の中で結びついていき，徐々に形がはっきりしていきました。現場で働く先生方の声を，教職大学院生という立場で聞くことができたからこそ，もやもやとした不安を無くすことができたのだと思います。子どもでも教師でもない自分で，先生方とお話ができる合同カンファレンスという場は，とても貴重で学びの多い場になったように思います。

今回のカンファレンスでは，課題をこなすことに必死で，テーマにあるように「教育改革の展開を踏まえ，長期的な実践の展望をひらく」ことは困難でした。また自分の経験や考えをうまくまとめることができず，せっかく先生方と語り合える場であるのに，自分のよく分からない話を聞かせるだけになってしまう場面もありました。これからのインターンシップやカンファレンスにおいて，私も熱心に学ぶ姿勢を持ち続け，一人の教師として語れるよう，多くを学び成長していきたいです。

Staff 紹介

山野下　とよ子　Toyoko　Yamanoshita

今年度教職大学院のスタッフの一員(兼担)として着任しました山野下とよ子と申します。学部の方では「教科算数基礎」など算数・数学教育を担当しています。

私は隣りの石川県金沢市に住んでいまして，３８年間金沢市にある小学校（養護学校も）で教員をしてきました。２０１０年２月に「教育内容・教材開発研究会シンポジウム」でもお話させていただいたのですが，小学校教員時代を振り返ってみて，自分が取り組んできたことはこんなことだったと思えることが４点ほどあります。１つ目は私の初任が養護学校（現在の特別支援学校）だったことや，金沢市の山間部にある複式学級を受け持つ中で「今，子どもが必要としている，子どもに合った学習内容を教える」ことの大事さです。障害を持った子ども達に教科書に沿ったことはできない場合が多いです。また，複式学級では子ども達の学びに合わせた授業内容でないと効果がありません。年間計画は子どもに合わせて編成し，教材や教具を作っていく必要がありました。子ども一人ひとりに成長のストーリーがあることに気づき，子どもから学ぶことの大切さを教えられました。２つ目は「教材の深い認識（教科の認識）を持つこと」教材分析です。これが十分でないと授業は楽しくないし，子ども達の理解を浅くし，つまずきを作ってしまうこともあります。教材研究を懸命にやったつもりで授業に臨んでも，前の学年までに学習したことを忘れたと子ども達が言ってくることもありました。どんな学びをすることが概念化した認識になるのか，子どもの認識の発達過程も研究していきました。そのためにも「子どもから学ぶ」反省的思考が欠かせませんでした。３つ目に算数・数学では特に「概念のイメージ」がとても大切です。実物や本物を持ち込んでの活動や操作がイメージを作り出し，そこから算数の構造化された図であるシェーマへと形成されていくことで学習内容がつながっていきます。この「イメージやシェーマにこだわった授業づくり」に取り組んできました。そして４つ目に「仲間や同僚，異種の仕事人から学ぶ」ことでした。この他者から学んできたことがこれまでどれほど大きかったかあらためて思います。今年度からお世話になる教職大学院のような学びの場があったわけではないのですが，学生時代からの算数・数学教育サークルの仲間たち，全国の研究会で知り合った先生方，職場の同僚や父母達，そして教員でない仕事人から，と自分から求めて学びの場へ出かけていきました。時にはミルクやおむつを持って子連れで出かけたりもしました。「他者から学ぶ」ことは自分の実践を考える上でなくてはならないものでした。出かけるだけでなく，学校へ来てもらい普段の授業を見てもらっての意見はとても参考になりました。私は自分の教室にいつでも誰でも「来てください」と言ってきました。授業参観日でない日に親がきて，半日ぐらい子どもと過ごされると「子どものありのままを見れる」と好評

でした。こんな教員時代の中で私の大事にしてきたことは「授業は自分がわかって（納得して）楽しいことを子どもたちと作っていく」「常に自分のやっていることを，これでいいのかな？と振り返る」「子どものつぶやきに耳を傾け，これはちょっと変だぞという感覚を持ち続ける」「学ぶとはなぜそうなのか，原理がわかること」でした。

教職大学院に関わらせていただいて，初めは何が何かわからないままうろうろしていましたが，だんだんとこの大学院のめざすものが見えてきました。「未来に生きる子ども達を育てる高度専門職業人としての教員養成」のために「教員が学び続けるための研修システムの構築」や「学校拠点方式による長期インターンシップ」など，「実践的ケーススタディ」を中核として行われていること。松木専攻長の言われる「学校で実際に起きている課題を具体的に，個別的に，実際的に取り上げ，その省察と再構成を通じて，新たな実践に結合する実践ー省察ー再構成のサイクルを導入することでした。その実践ー省察ー再構成のサイクルは同僚との事例の検討を土台としています。」の意味が，週間カンファレンスや合同カンファレンスに参加させてもらう中で少しずつ理解できるようになりました。学校現場の状況は社会の変化に伴って変わっていきますが，ここ１０年間ぐらいの間の変化はとても激しいものがあります。そんな中で，教職大学院で学ばれている皆さんと共に，私もまだまだ未熟ではありますが，スタッフの一員としてこれまで以上に「子どもの成長発達」や「教科とは何か」「教授法のイノベーション」などを学んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

中川　美津恵　Midue　Nakagawa

雪と鉛色の空を経て，北陸の春は一気に花開き，桜や木蓮，辛夷，水仙，菜の花と楽しみ，今は若葉やつつじが目に鮮やかな季節になってまいりました。今年度，教職大学院にお世話になります中川です。よろしくお願いいたします。

昭和４９年に福井大学教育学部中学校教員養成課程国語科を卒業し，福井県の教員として高校に３０年勤めた後，中学校３年，行政２年，小学校３年と経験させていただきました。卒業後，大学には免許更新講習の協力という形で２年，そして教育研究所では寺岡先生，遠藤先生らのご指導をいただき，それ以来のご縁です。学校現場が長くなるにつけ，論文や研究からはどんどん縁遠くなり，恩師や大学に対して面目なさを感じておりました。しかし，大学は教職に携わる私どもにとって，研究テーマや不明な箇所が生じたとき，何かの折には頼りとする最後の拠り所といった存在でした。

今回，年代・校種・職種を越えて，実践を語り合い，聴き合い，考え合う中で，望ましい授業や学校の姿を探り出すという，新しい形の教職大学院のメンバーに加えていただくことになり，共に学んでいけることを嬉しく思っております。

まだ日は浅いのですが，教職大学院で全国各地から集まってこられた志高いスタッフの方々と出会い，メンバーが実に多彩で，発想が豊かで引き出しが多いことに驚いています。６階にあるコラボレーションホールの書棚には，教職大学院が発足以来５年間にわたって１７０を超える院生の長期実践研究報告書が並んでいます。学校に勤務しながらそれぞれの学校の課題に果敢に挑戦し，解決に向け歩んだ教職員の方々の知恵が結集されており，教育関係の書籍に匹敵するレポートの数々だと私は思います。

敬愛する生涯国語教師として前人未踏の仕事をされた大村はま先生の後半生の口癖は「教えない教師が多すぎる」でした。浴衣がうまく畳めず四苦八苦していた子どもの頃，通りかかった母親から「裾を持ちなさい」と言われ，両脇の裾を持ってから肩の方を持つと，ぴーんと長方形になって，畳み方が会得できた経験から，先生は「きちんと畳みなさい」と言う教師でなく，「裾を持ちなさい」と言える教師でありたいと願われました。「きちんと畳みなさい」は人を責める言い方である，そうではなく具体的で必ず成功できることを適切に示してこそ教師であると先生はおっしゃいました。また，藤原正彦氏は作家の新田次郎，藤原ていのご子息ですが，「我が家の文運はすべて大村はま先生の贈り物」と感謝しています。はま先生は諏訪高女でていを教えられたのですが，その当時のことを正彦氏につぶさに話されたそうです。「７０年以上も覚えているのだから，よほど真剣に生徒の作文を読まれていた筈。先生の作文指導と励まし」のお陰で『流れる星は生きている』が産まれ，「母に刺激されて父が書き，私も書き始めた」と，一人の師の指導力，情熱が教え子の人生に大きな影響を与えたと称えています。

現在はグローバル化，情報化，少子高齢化等の社会変化

に伴い，複雑化した課題に対応できる人材の育成が求められています。そのためには未来を切り開く子どもたちを育てる学校教育，教師の資質能力の向上がますます期待されています。

私は小中高の教職生活を経て，頭や心や体の根っこの部分を育てる小学校教育，学び合う集団づくりを目指す中学校教育，学校の特色を生かした高校教育，それぞれの大切さ，そして小中高と一貫したつながりの必要性を実感しました。どこにおいても学ぶ喜びや体を鍛え，共に協力して学校行事などに取り組む楽しさを味わうことが，その後の進路への強い思い，社会貢献への気持ちにつながっていくと思うのです。

生き生きと活動する人を紹介するキャリア教育の大切さも痛感しています。「あの人のようになりたい」と憧れを抱き，将来の自画像を描く。子どもたちは小学校で将来への夢を描き始め，中学校，高校でその夢は軌道修正されていきます。教師は夢を育む子どもたちに寄り添うという尊い仕事だと思います。私自身，尊敬する校長先生の「我が校からオリンピック選手やノーベル賞輩出を」の夢を引継いできており，全校集会などで子どもたちに世界に羽ばたくことを折々伝えてきました。

昨春の退職以来，講演や講座に赴き，学ぶ楽しさ，教えられる立場のときめきも味わっています。今後，今まで先輩諸氏から受けた教えを少しでも伝えていけることを楽しみにしております。

前園　泰徳　Yasunori　Maezono

皆様，はじめまして。特命准教授に就任した前園泰徳と申します。よろしくお願いします。

さて，唐突ではありますが，皆さんにお聞きしたいことがあります。教育とは何ですか？　なぜ教育をするのですか？　教師とは何ですか？　皆さんは社会に対して，どのような貢献ができるのですか？　幸せとは何ですか？

おそらく，これらの問いに対し，即座に答えられる方はいないでしょう。なぜなら，これらは絶対的な正解のない問いであり，ある程度の哲学が自分になければ，自分なりの答えを見出すことができないからです。上記の問いは，私自身に対する一生の問いでもあります。これらの問いを，皆さんとともに，この福井大学の教職大学院において探究していきたいと思っています。

私が現在関心を持っていることは，以下のようなキーワードで表すことができます。＜環境教育＞，＜ESD（持続可能な発展のための教育）＞，＜生物多様性＞，＜保全＞，＜探究＞，＜教師教育＞，＜教員養成課程＞，＜地域＞，などです。特に，環境教育とESDについて，勝山市を舞台に実践活動を行いながら研究しています。福井県ではこれまでESDはほとんど浸透しておらず，環境教育と呼ばれているものも，実際は大半がイベントや体験のみで，「教育」の域に達しているとも言い難い状態でした。また，環境教育は，教科ではないために力が入れられておらず，教員の関心や履修経験も少ないうえ，県内の大学に本格的に環境教育を研究，実践しているところがなかったため，残念ながら時代が求めているものには遠く及んでいませんでした。そこで，１）質の高い環境教育やESDプログラムとはどのようなものか，２）学校教育における環境教育やESDの質向上のためにいかに教師教育を進めるか，３）これらを地域レベルでいかに定着させるか，４）これらでいかに学力や生きる力を育むか，などを研究し，福井，そして，全国に成果を発信していきたいと考えています。

このような興味関心は，教職大学院スタッフとしては，異色なものでしょう。その背景には，私の経歴が異色であることが強く関係しています。少し紹介します。私は，２年前まで，福井県とは縁もゆかりもない生活をしていました。そもそも，もともとは動物生態学の研究者でした。まず，１０年前にブラックバスやブルーギルといった外来種が，在来生物群集に及ぼす影響を研究して東京で学位を取りました。その後，２つの大学を博士研究員として渡り歩き，奄美大島において外来種や温暖化によって北上する昆虫の研究を行いました。奄美の自然は素晴らしいものでしたが，一方で，人々があまりに簡単に地元の宝であるはずの自然を壊してしまうことに強い衝撃を受けました。そして，その背景に，いかに学校教育において，地元のことを客観的視点から学ぶ機会が少ないかを知ったのです。そこから，子どもたち対象の環境教育がスタートしました。しかし，いくら自分1人が頑張って授業を行っても，奄美の学校すべてをまわることはできませんし，継続的な学びの時間を創ることもできないという限界を感じました。そこで，私の関心は，教師教育とともに，教員と協働でデザインする環境教育へと移行していったのです。奄美では合計８年間を過ごしました。そのうち最後の２年間は，龍郷町という町の教育委員会に所属し，環境教育を町内全学校で現場の先生とともに推進する「環境教育推進指導員」となりました。全国で唯一の環境教育専任の教員という扱いで

した。特に，環境教育の日常化，教材作成，指導要領作成，探究的プログラム作成，そして，Ｂ型学力の向上が，その時の大きな成果です。

２年少し前，福井県に来ました。勝山市で，環境保全推進コーディネーターという役職を創っていただいたのです。そこで，奄美における活動を深め，市内全小中学校において，ESDを組み込んでより進んだ環境教育を展開しました。さらに，それを学校から地域に発信することで，地域レベルで環境教育を浸透させ，持続可能な社会創りを推進してきたのです。特に現場の先生とともに，探究的な学びを徹底し，子どもから持続可能な社会作りを推進してきたことは，日本環境教育学会でも注目されています。

今年４月からは，福井大学のスタッフに就任するとともに，勝山市と福井大学が共同研究として行う「ESDのプログラム開発や地域への浸透」に携わっています。福井大学の教職大学院は，教師教育機関としても，教員養成機関としても，全国の教職大学院の模範となる教職大学院界のトップランナーです。そこにスタッフとして加わらせていただくことは，大変光栄なことです。ここで，今後の教育に対して少しでも貢献できるよう，皆さんと一緒に学び，成果を「福井モデル」として，発信していこうと思っています。

ESDは「持続可能な社会を創る」という今後の教育の目的そのものと言ってよいものです。まさに全ての教科の枠を越え，人類の持てる英知を結集しなければ実現できないものです。そこに至る道には，ガイドラインがありません。また，どの道を辿れば良いかの正解もありません。より良い道を選択するには，多くの人が探究的なプロセスを会得し，活発に議論していかなくてはなりません。探究できる人材を育てるには，教師が「探究を行える」「探究のプロセスを指導できる」ことが前提となります。ここ福井大学の教職大学院で，「本当の探究」を探究していきましょう。自分のこれまでの常識を一度壊し，これからの学びで再構築することにより，きっとあなた自身の哲学が生まれてくるはずです。

院生紹介

船木　知憲　ふなき　とものり

はじめまして，船木知憲です。現在啓新高等学校でインターン生としてお世話になっています。高校は石川県立七尾高等学校，大学は福井県立大学経済学部経営学科出身です。

私は中学三年生の頃から陸上競技の競歩を続けてきました。始まりは中学三年生の時に教育実習生に教わってからです。先生のご指導があって，それまで続けていた中長距離走では決してうまくいっていなかった私が，わずか一か月の練習で，いきなり県大会四位という成績を収めることができました。高校，大学でも競歩を続け，優れた指導者や，素晴らしい仲間たちに恵まれ，ケガや挫折は何度もありましたが，自己ベストを更新続けることができました。また，自己ベスト更新の背景には常にかけがえのない人々との出会いがありました。その中で私の人生はとても豊かになりました。競歩を通して，「人こそが唯一無二の財産である」と考えるようになり，人の成長に強く関われる教師という聖職へのあこがれが強くなりました。

大学四年生の教育実習では母校の七尾高校に行きました。わずか二週間でしたが，大切なことを二つ学びました。一つは現場の先生方への尊敬の気持ちです。お忙しい中，実習生の私のために時間を割いてくださったことや，高校時代もお世話になった先生が今でも私のことを気にかけてくださっていたことにとても感動しました。もう一つは教える喜びです。陸上部で競歩をしている生徒にコーチ兼指導をする機会がありました。後にその生徒が自己ベストを更新し，北信越新人で三位になったと聞いたときは自分のこと以上に嬉しかったものです。教育実習は教師になりたいという気持ちをより強固なものにしてくれました。

そういった中で，大学院進学に至ったのは自分の今後数十年と続く教師人生への投資です。大学院で学ぶことで，人との出会い，とりわけ生徒との出会いをより良い出会いにできると考えたのです。より良い出会いというのは生徒，私双方にとってのものです。また，より良い出会いは究極的にはより良い人生に通じると考えていま

す。より良い人生のために私は教師としてまだまだ成長する必要があるのです。

長期インターンシップにあたっては一日一日を大切にし，朝の挨拶一つにとっても，「今日も出会えてうれしい」という気持ちを込めていきたいです。教科指導では生徒にとってより良い授業とは何かを常に考え，探究していきます。これは一瞬一瞬を大切にし，向上心を絶え間なく持つ，競歩の精神に由来します。私のすべては競歩に通じるのです。

牧田　祥代　まきだ　さちよ

はじめまして。今年度，教職大学院教職専門性開発コースに入学しました牧田祥代です。教科は英語で，丸岡南中学校で週３日のインターンシップをさせていただいております。

私が英語に興味をもったきっかけは，高校の時に行ったＳＳＨのアメリカ研修です。研修の主な内容は現地の大学を訪問し，化学や物理を学ぶという内容で，文系の私にとっては関係のないものと思っていました。しかし，当時の担任の先生が「海外へ行って，視野を広げることが大事だ」と言って，私の背中を押してくれました。研修では，予想通り理系の分野は理解できませんでしたが，現地の学生と交流できたことは私にとってとても大きな出来事でした。今までは筆記の学習が中心だった英語が，コミュニケーションの手段になるということを直に感じた瞬間でした。このことをきっかけに，もっと世界中の人々と話したいと思うようになり，大学は外国語学部へ進学しました。大学時代は，カナダに約４ヶ月滞在しました。そこでは，ホストファミリーや現地の大学の先生方を通して，カナダの人々の温かさや文化の違いを感じることができましたが，一番嬉しかったことはクラスメイトだった中国人と仲良くできたことです。その時は日中間で政治問題が起こり，中国では反日運動が多発していましたが，それらに関係なく仲良くできたことに感動しました。そして，私たちを繋げてくれた英語に感謝しました。

学部での教育実践の機会は，３週間の教育実習のみでした。私は高校で教育実習をさせていただきましたが，自分の頃とは授業のスタイルががらりと変わっていました。グループ学習が多くとりいれられ，生徒主体の授業が展開されていたことにとても驚きました。私も授業で生徒が活動する機会を意識して授業に取り込みましたが，うまくまとめることができず，課題が数多く残りました。また，３週間という短い期間の中では自分の授業のことだけで頭がいっぱいになってしまい，生徒指導や学級経営などについてはあまり学ぶことができませんでした。

教職大学院では，主にインターンシップで現場の先生方や生徒と関わっていく中で，生徒主体の授業のつくりかたや生徒指導，学校経営など，教師の総体を学び，自分なりに教師としての理念や信念を確立することが目標です。そして，私が高校生の時に先生にしていただいたように，生徒の視野を広げ，背中を押してあげることができたらと思います。生徒の成長をみながら私も負けずにがんばりますので，どうぞよろしくお願い致します。

宮川　翔太　みやがわ　しょうた

はじめまして。今年度，福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学しました，宮川翔太と申します。教科は英語です。この４月より，啓新高等学校にて一年間にわたる長期インターンシップをさせていただいております。私立，そして校種も高等学校という現場に自分がいることが未だに不思議に感じますが，日々多くのことを学ばせていただいています。

私は，中学生のころから教師という職業に憧れを抱いていました。授業は楽しくわかりやすく，ときにはきびしく熱意を持って指導をしてくださる先生方の姿を見て，「あんな人になりたい」という思ったことがきっかけでした。教師の仕事というよりは人間的な魅力に惹かれた

ことが大きかったと思います。その後，生徒の気持ちになって考えることができる教師になれたらという思いを持ちながら高校，大学を過ごしてきましたが，このときまではまだ，漠然とした「夢」でしかありませんでした。そして，大学卒業間近までどの道に進もうか迷っていたところに町採用のＴＴ講師の話を受け，夢の実現の機会だと思い即決しました。その後２年間越前町立越前中学校と県立丹生高等学校に勤務することとなりました。

学校での業務はＴＴだけにとどまらず，Ｔ１として授業をする機会や，委員会，部活動，学年副担任等などの校務分掌など多くの経験をさせていただきました。しかし，私がこれまで実践してきたことがすべて上手くいったかと言えば，そうではありません。生徒に対しての指示が全体に行き届いていなかったり，授業が思ったようにいかなかったりと失敗ばかりで，毎日，私は生徒に何をしてあげることができたのかと自分に自信が持てず，日々の実践を振り返ることもなくなっていました。また，生徒指導をする上での悩みをあまり打ち明けることができず，このまま教職を続けていくべきかどうか悩んでいました。

そんなときに教職大学院の説明会に参加し，実践をもとに同じ志を持った院生や経験のあるスクールリーダーコースの先生方と話し合える機会があることを知り，進学することを決めました。これまでの２年間で学んできたこと，悩んできたこと，そしてこれからの２年間の実践を振り返っていくなかで生徒を見る力や，日々変化する子供たちの変化や，教育の現場に対応できる力を付けていきたいと思います。これまで抱いてきた教員になる夢を実現させることを目標に，頑張っていきます。２年間という限られた時間ではありますが，毎日少しずつ成長を重ね，２年後に大きな成長を感じられるよう，自分を見つめる努力を怠らず続けていきたいと思います。２年間よろしくお願いいたします。

山越　翔太　やまこし　しょうた

はじめまして。教職専門性開発コースに入学しました山越翔太です。今年，福井大学教育地域科学部附属小学校でインターンをさせていただくことになりました。専門教科は算数・数学です。

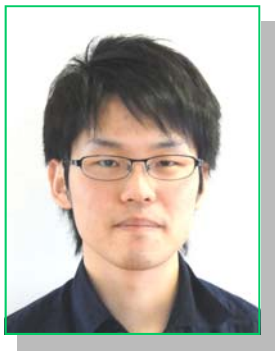
インターン先では，３年生に入らせていただいています。今はまだ私自身も学校現場に，子どもたちも私に慣れている段階です。しかし，まだわずか１ヶ月ですが，実際に学校現場に入らないと見えてこない会議の様子や普段の教師の姿を見て，教師と言う専門職の難しさと奥深さを実感しています。その中で，教師のクラスの運営と子どもとの関係づくり，授業づくりについて学んでいけたらと思います。そして，できるならそれらを社会と関連付けて考えていけたらなと思います。

私が教職を志したのは，中学校の３年生の時です。理由はいくつかありますが，大きかったのは私自身の「いじめ」の経験です。私はいじめを受ける中で，勉強も部活も頑張ってきたわけですが，その中で疑問に思ったことがあります。「いじめ」って何だろう。「いじめ」は大人の中でもあるのか。そもそも「学校」って何だろう。というような疑問を持ちました。高校時代も同じく「いじめ」を受けましたが，担任の先生の対応で無事に３年間を過ごすことができましたが，私自身の経験とテレビ等のメディアで報じられる「自殺」の問題から教師という道を志しました。

転機となったのは，福井大学の学部４年生の教育実習でした。ある「道徳」の授業をさせていただいた時に，「子どもの学びには過程があり，推論・考察（心の葛藤）を経て，教師が伝えたいことが伝わる」ということ。教師が伝えたいことがどのくらい児童に伝わるのか，授業の理解度も個人様々であることを学びました。普段の教職の勉強の中で知ってはいたことではありましたが，実際にそれを目にすると「子どもたちの『分からない』を『分かる』にするにはどんな授業をすればいいのだろう」と思いました。

当初は「いじめ」の問題に向き合うというある意味ネガティブな志でしたが，教育実習のこのような学びから，子どもたちの「学びの過程」にも興味を持つことができ，そこから子どもの学びを促す授業づくりを目指すというある意味ポジティブな志を持つことができました。そして，今インターンをさせていただいて早1ヶ月，「授業」は決まった４５分だけではないということを実感しています。普段の子どもたちとの関わりやクラスの運営，その全てが「授業」であり，そこから子どもたちは何かを「学び」得るのだということが子どもたちの純粋な行動を見ていて分かってきました。

少しずつではありますが，私自身の目指す教師像が変化してきているように思います。この２年間の教職大学院の学びの中で，自分自身の教師像を再構成していきたいと思います。拙い文章でしたが，これから宜しくお願いします。



棟田　章裕　むねだ　あきひろ

今年度，教職専門性開発コースに入学した棟田章裕です。４月から附属中学校で長期インターンシップをさせて頂いています。専門教科は理科です。大学院では，専門教科が理科のストレートの院生がいないため，少し寂しく感じています。

今回は自己紹介ということで，私がなぜ理科教師を目指すようになったのかとこれからの目標を話させて頂こうと思います。正直に言うと私自身，小学校，中学校時代の理科はあまり面白くありませんでした。理由として，理科は覚えるものであるというイメージを持ってしまったため，暗記の必要性を見出せていなかったからです。またそれとは別にただ昆虫が嫌いだったということもありますが・・・。

このような理科のイメージから抜け出し，現在の道に進もうと思ったきっかけは，高校時代に化学の無機化学分野を学んだことでした。そこでの学びの１つは，金属イオンの違いや，金属イオンと結びつく陰イオンの違いで化合物の色が全く違うことでした。私は目に見えないほど小さな原子・分子が結びつくことで様々な色がつくことがとても不思議でした。またそれらの目に見えない反応を紙の上で目に見える形で議論していることに違和感も感じました。本当にそんなことが試験管の中で起きているのか，ある特定の組み合わせだとなぜ反応が進むのか等，なぜ？なんで？という疑問が授業で学ぶにつれ生まれていきました。それらのモヤモヤを先生に質問したところ，高校の範囲を超える内容でしたがその原理原則の極一部を教えて頂き，教科書で覚えていた単語のさらに奥の部分を知ることができました。すると，教科書がすべてではなく，その裏にある化学のより深いところを知りたいと思い始めました。また，自分が教えて頂いたように教科書の裏側を伝えることのできる理科教師を目指すようになりました。

そのため大学は金沢大学理工学域物質化学類（旧理学部化学科）に進学しました。そこで感じたのは答え（結論）を導き出すことの難しさでした。小・中・高・大学の３回生まで学んできたことには必ず答えがありました。しかし４回生での卒業研究では，答え（結論）が見つからず失敗の連続でした。そんな時恩師から「きみは答えを早く知りたがりすぎて早合点が多い，自然というのはそんなに単純なものじゃない」という言葉をかけて頂きました。この「自然は単純ではない」ということを小学校から感じることができていれば理科が面白かったのではと今は思っています。

最後に，教師の専門性を高めることで生徒に理科が面白いと思わせられるような教師の土台をつくっていきたいと思います。

山本　泰平　やまもと　たいへい

はじめまして。今年度，福井大学教職大学院教職専門性開発コースに入学した山本泰平です。担当教科は社会です。これから１年間，丸岡南中学校でインターンシップさせていただくことになりました。

この文章を書いている今はインターンシップをさせていただいてから約１ヶ月たちました。インターンシップを始めたばかりの頃はわからないことがわからない状況でしたが，多くの先生・先輩・教授にアドバイスをいただきながら少しずつではありますがやるべきことを見極め行動できるようになってきました。

私が教師になろうと強く思ったのは高校時代です。しかし，それ以前からお世話になってきた先生が好きでどこかでそんな人になってみたいと漠然と考えていました。高校で大学の進学を考えるときも初め

は教育大学や教育学部を見ていました。ですが，目標が決まっているならば遠回りだけれど教育系ではないところに進学し，様々な刺激が得られると思い同志社大学の経済学部に入学しました。

学部では「京都の企業の伝統と革新」をテーマにフィールドワーク中心に研究を進めて行きました。そのときの学びの中で多くの印象的な言葉に出会いました。今回はその中の一つを紹介します。それは「まず井の中の蛙になれ」ということでした。初めは，否定的な言葉であるためなぜ狭い視野でいいのかと疑問でした。しかし，自分の身の回りのこと(自分の研究，知識，はたまた日本)を知らないままでは社会・世界には通用しないということを研究を通し実感し自分の中に武器を持つことが大切であり，その結果，自信を持って大海(世界)に出て活躍ができると今では考えています。

大学院では週３日のインターンがあります。そして，教師・講師とは少し違う立場で中学校に行きます。それを生かして生徒達に何か自分の武器になるもの・そのきっかけとなるようなものを見つけるための支援をしていきたいと考えています。

最後になりますが，大学院を卒業する際には自分自身もしっかりと武器を手にいれて自信を持って教師になれるように２年間毎日多くのことを感じ，中身のある時間にしていきます。よろしくお願いします。

西川　文野　にしかわ　あやの

はじめまして，こんにちは。今年度より，福井大学の教職大学院教職専門性開発コースに入学しました西川文野です。３月まで，京都市にある佛教大学に在籍し，文学部日本文学・日本語文法コースで学んできました。

私が，教職大学院に入ろうと思ったきっかけは，２つあります。

１つめは，文学部であったため，子どもたちと関わることが少なかったことや，現場の様子についてほとんど知ることができなかったことです。ですが，地元に帰り，福井で教師になりたいと思いが強くありました。しかし，福井の教育現場については，教育実習の数週間のみしか，学ぶことができませんでした。そんな私が，このまま現場にでても大丈夫なのか，子どもたちを指導することができるのかという心配がありました。

２つめは，大学在籍中には，週１で，京都の小学校の特別支援学級でボランティアをさせていただいておりました。京都の小学校では，特設支援学級が３クラスあり，クラスによって，大きく学級の様子や，雰囲気，児童の態度が異なっていました。そのため，教育の進んだ，福井県の特別支援の実態について，知りたかったことや親学級との，交流方法など，学ばせていただきたいと思いました。

４月からは，中藤小学校の特別支援学級「なかふじルーム」でインターンシップをさせていただくことになりました。中藤小学校は，今年から新校舎となり，その特色を生かした，オープンスペースや多目的スペースをいかした授業など，新たな学習を進めようとしています。その中で，私がどれほどの知識を吸収でき，これから生かすことができるのか，非常に楽しみです。

教職大学院のインターンシップは４月より始まっており，２週間が経過しました。少しずつ，一日の流れや，交流学習など，分かるようになってきましたが，まだまだ，手探り状態です。児童も新校舎になり，環境に戸惑っているようですが，児童と少しずつ慣れてきたいと思っています。

インターンシップでは，子どもの表情や素振りなど，些細な変化を見逃さずに，子どもと関わっていけたらいいなと思っています。

特別支援の児童への指導方法について，教育実習で学んだこと以外に，ほとんど経験がありません。学部生のときに，学べなかった「特別支援」について，しっかり学びたいと思います。子どもたちに安心して，悩みや分からないことを打ち明けられるような教師を目指して，頑張っていきたいです。多くのご迷惑をおかけすると思いますが，大学の先生や，インターン先の先生，現職の先生，多くの悩みを共有し解決していくことで，学びをより深めていきたいと思います。よろしくお願いします。

◆研究集会案内◆　　福井大学教育地域科学部附属中学校

第48回　教育研究集会

学びをつなぐ《探究するコミュニティ》（1年次）
－省察を捉え直し，次なる学びに生かす－

本校では昨年度まで「探究」と「コミュニケーション」をキーワードとして，子どもも教師もが学び合う「探究するコミュニティ」の実現に向けた研究を進めてきました。本年度より第Ⅸ期新研究主題「学びをつなぐ≪探究するコミュニティ≫」のもと，新たな研究に取り組んでいます。単元の中で子どもたちは，自分の学びをどのようにつなぎ，どのように学びを実感していくのか。１年次は，単元における探求学習を問い直すため「主題－探究－表現」型授業における「省察」に焦点を当て，単元を振り返るだけでなく，次なる学びを生み出すための「省察」の在り方やデザインについて研究を進めています。

つきましては，本研究集会に多数のご参集いただき，ご指導，ご助言を賜りますようにご案内申し上げます。

【期 日】　平成25年6月7日（金）
【会 場】　福井大学教育地域科学部附属中学校
【日 程】

Symposiums

子どもたちの学びをつなぐ
～子どもたちが学びを実感できる授業を構築するために～

◆ 秋田 喜代美　先生（東京大学大学院　教授）
◆ 鹿毛 雅治　先生（慶応義塾大学教職課程センター　教授）

「生きる力」を育むために必要な，思考力，判断力，表現力を培うことができる協働探究学習をどのように構築していくのか。子どもたちは，単元を通した学習課題である主題をもとに，仲間と協働して探究学習を展開していく。その中で，子どもたち自身が自分たちの学びの変容を実感できるために，教師はどうあるべきか。講師の先生方から協働探究学習とは，どのような授業なのかを伺いながら，授業づくりのポイントや教師の指導性と協働研究の在り方について考えていきたいと思います。

【申込方法】

- 平成２５年６月３日（月）までに，申込用紙を郵送またはファックスでお送りください。
  （申込方法や交通機関の詳細は　http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-j/　をご参照ください。）
- 会費は２０００円です。
- 問い合わせ先　〒９１０－００１５　福井市二の宮４－４５－１
  福井大学教育地域科学部附属中学校　教育研究集会　受付係
  ＴＥＬ：０７７６－２２－６９８５
  ＦＡＸ：０７７６－２２－６７０３

平成25年度　福井大学教員免許状更新講習について

福井大学教職大学院　　松田　通彦

平成２１年４月に始まった教員免許更新制において，教育職員免許法第９条の３に基づき開設された教員免許状更新講習が今年度で５年目を迎える。教員養成系学部を有する大学には，この制度の目的である最新の知識技能の修得の場としてのミッションを果たすことに関して，大きな期待が寄せられているのは周知のとおりである。

本学においても，受講者の先生方に満足いただけるよう，毎年いずれの分野・領域においても，創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきている。特に，必修領域（教育実践と教育改革I）を担当する教職大学院では，「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ――実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る――」をキーコンセプトに，専門職として探究し合う新しい方法を採り入れた講習を実施しているが，プログラムの特色として次の点を強調している。

教職大学院の教師教育のノウハウを活かして，「実践・省察」を重視した講習にしていること

少人数による話し合いを基本とし，そのグループ編成は校種，年齢，地域，教科等の枠組みを解いたものにしていること

必修領域１２時間に，選択である「教育実践と教育改革Ⅱ」６時間を加えて，連続３日間の計１８時間で一括りとする講習を提供していること

具体的に述べると，１日目は，受講者が作成した自らの教育実践をまとめたレポートの報告から始まる。実践の経験を交流し課題意識を共有するために，グループのメンバーで語り合い・聴き合いを行うためである。その後，グループ内で，多くの優れた実践事例資料を読み深め，展開の筋道をたどる活動に取り組む。２日目は，１つの実践事例を取り上げて考察したことを各自レポートにまとめ，その後，新たなメンバーで構成されるクロスセッションの中で報告会を行う。３日目は，教師としての自分の歩みを振り返り今後の展望を拓く目的で，自身の教育実践レポートの作成に取り組み，その後，クロスセッションを通して省察を深めるという流れになっている。

レポート作成や報告に必要な時間の確保，比較的新しい優れた実践事例資料の収集，ファシリテーションのスキル向上等，解決すべき課題は少なくない。しかしながら，事後評価アンケートから垣間見える受講者のニーズや要望に沿うべく，絶えず改善を重ねてきたつもりである。今後とも，一層充実した講習にするため，細心の注意を払いながら丁寧な運営を心がけていきたいと考えている。

講習の詳細については，以下のとおりである。

対象の職種　教諭および養護教諭

講　習　名　教育実践と教育改革Ⅰ（教育の最新事情）・・・・・必修講習部分（２日間）
教育実践と教育改革Ⅱ（教育実践の省察と展望）・・選択講習部分（１日間）

日程・会場　**※３日間とも9:00～16:20　各回とも上段が必修講習部分で下段が選択講習部分**

①平成２５年　７月２３日（火）～７月２５日（水）
　平成２５年　７月２７日（木）　３日間とも福井県自治会館
②平成２５年　７月３１日（水）～８月　１日（木）
　平成２５年　８月　２日（金）　３日間とも福井大学文京キャンパス
③平成２５年　８月　７日（水）～８月　８日（木）
　平成２５年　８月　９日（金）　３日間とも福井県立大学小浜キャンパス
④平成２５年　８月２１日（水）～８月２２日（木）
　平成２５年　８月２３日（金）　３日間とも福井大学文京キャンパス
⑤平成２５年１２月２５日（水）～１２月２６日（木）
　平成２５年１２月２７日（金）　３日間とも福井大学文京キャンパス

実践し省察するコミュニティ

Communities of Practice and Reflection　since 2001

6月ラウンドテーブル速報

Fukui Round Tables Summer Sessions 2013
For Reflective Practice, Organizational Learning,
and Reflective Institutions
of Teacher Professional Development

2013.6.29-30

福井大学総合研究棟Ⅴ（教育系１号館）他

福井大学教職大学院

教育学研究科教職開発専攻

6/29　Sat. 12:40-17:40

専門職として学び合うコミュニティを培う

日本の教師教育改革のための福井会議2013

４つの領域ごとに，専門職としての実践力を培う学びをどう実現していくか，それぞれの職場・地域・大学での取り組みをふまえて語り合います。（各zoneのテーマは前回のものです）

session 0　会の進め方について
session 1　実践交流の広場　実践の広がりに出会う
session 2　四つの問題提起　方向性を探る
session 3　テーマ別の話し合い　問いを深める

zone A　学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ
zoneB　教師：学び続ける教師を育てる〈人〉と〈組織〉のパラダイムを考える
zone C　コミュニティ：世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする
zone D　授業：授業改革の扉をひらく

6/30　Sun. 8:30-14:00

実践研究福井ラウンドテーブル2013

実践の長い道行きを語り　展開を支える営みを聞き取る

実践記録を土台に，小グループで実践の歩みをじっくり語っていきます。心に残っている場面。言葉，表情，行為。その時々に感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えること。語られる展開に耳を傾け，活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきます。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場，実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが，その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になります。１つの報告に１時間から１時間２０分程度です。（報告・話し合い含む）

参加申し込みの方法は，福井大学教職大学院ホームページ http://www.fu-edu.net/ をご覧ください。今年度より受付方法を変更し、ホームページから入力フォームに必要事項を記入して送信していただく形になりました。受付期間は，５月２４日から６月２３日を予定しています。あわせて，６月３０日のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。ご希望される方は入力フォームからお申込み下さい。

Schedule

5/25 sat　合同カンファレンス（予備日）

6/29sat - 6/30 sun　実践研究福井ラウンドテーブル2013

［編集後記］

福井大学に教職大学院が創設されて6年目になります。昨年度末の総数で130名の修了生が学び舎を巣立って行きました。現在彼らの多くは、母校で修得した豊かな知見と実践的指導力を糧に、それぞれの地域、学校、教育機関等で大活躍をしています。今回、Ｍ１の自己紹介文を読ませていただきながら、現役院生もどんどん後に続いてほしいなという強い思いに駆られました。皆さんが大きなビジョンを描いて、貪欲にしかも謙虚に学ぶひたむきな姿勢に熱いエールを送り続けたいと思います。（M）

教職大学院Newsletter　No.53
2013.05.18発行
2013.05.18印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp